

池田病院

検診車に経鼻内視鏡検査システムを搭載し、出張内視鏡胃がん検診に先駆的取り組みを果たす。

経口内視鏡検査は、一般的には前処置や挿入中の苦痛など、受診者に少なからず負担を強いる検査だ。こうした問題点を根本的に解決した、鼻から内視鏡スコープを挿入する経鼻内視鏡検査システムは今後、広く普及が予想される先進技術。静岡県の池田病院では同システムを2005年に導入して専用内視鏡検診車にも搭載し、出張胃内視鏡検診に取り組んでいる。



副院長 外科・内視鏡科
附属健康管理センター人間ドック統括

池田 聡先生

苦痛やリスクを受診者に 負わせてはいけない

池田病院は東海道新幹線三島駅と東名高速道路沼津ICとの間に位置する長泉町に位置し、診療、予防医学、老人福祉を3つの柱とする池田病院グループの中核施設である。40年前に院長の池田誠先生が開設した同院は、「地域に望まれる医療を提供する」という理念のもと、365日24時間休みなしの救急診療を実施。さらには、早くから地域住民の健康を守る予防医学にも着手し、人間ドック、出張内視鏡胃がん検診などで実績を残しながら、地域住民から深

く大きな愛着を寄せられる存在となるにいった。

ちなみに、池田誠先生による「電子内視鏡の出張内視鏡検診」は、日本初の取り組みとして学会発表されている。

先駆の歴史がさらに1ページ重ねられたとも言えるのが、静岡県東部では初の導入となった経鼻内視鏡検査システムの導入。受診者の負担を飛躍的に軽減した上部消化管内視鏡検査の実現である。案件の中心人物は副院長であり、東京女子医科大学消化器病センターの外科出身で、内視鏡科部長と附属健康管理センター人間ドック統括も兼任する池田聡先

生だ。

「健診施設において、人間ドック受診者や検診受診者がもっとも嫌がるのは、胃カメラ（経口内視鏡検査）です。苦痛に耐え難いと訴える受診者には鎮静剤で軽く眠らせる検査前投薬で対処もできますが、呼吸抑制などのリスクがあります。

ドックや検診などのスクリーニング検査にいられている受診者に苦痛やリスクは、負わせるべきではないでしょう」

楽で安全な 経鼻内視鏡検査システム

池田先生は、経口内視鏡による検査のあり方に問題意識を抱えていたころの経鼻内視鏡との出会いについて次のように話す。

「2005年に経鼻内視鏡と称する鼻からカメラを挿入する新しい検査システムがあると聞き、さっそく静岡赤十字病院の健診部長である川田和昭先生を訪ね見学をお願いしました」

10月に見学し11月には導入を決定したというから、まさに「即決」。それほど、明らかに秀でたシステムであったのだろう。

「自分自身で検査を受けてみましたが、食道ヘルニアを持ち、経口内視



経鼻内視鏡検診車での検査の様子

鏡検査がとても辛い私でさえ、嘔吐反射が皆無なうえ、受診中に会話もできる。

経口内視鏡では必要となる鎮静剤や、食道や胃の運動の抑制のための鎮痙剤も必要なく、楽で安全に食道や胃の本来の姿が観察できるメリットも見逃せませんでした」

経鼻内視鏡検査ができる 世界初の専用検診車導入

2008年からは経鼻内視鏡検診車が、池田病院の伝統とも言える出張内視鏡検診でも活躍している。

経鼻内視鏡検査システムを搭載した専用検診車の導入は開発したメーカーによると世界初になるそうだ。「当院院長が経口内視鏡で事業所へのお出張内視鏡検診を行っていたノウハウがあったうえに、開発メーカーとのコミュニケーションも良好でしたので、車載に関する技術的な問題はスムーズにクリアできました。

リスクがあったとしたら、1台

6,000万円に届くコストだったでしょう。新しい検診へのチャレンジを決心させたのは、院長が守りつづける『患者さんのために』との当院の姿勢です。受診者にとって良いことであれば、当初から採算がとれる必要はないと考え決断しました。

40年の歴史の中で培った池田病院の伝統が、経鼻内視鏡検査システムを採用させたと言っても過言ではないと思います」

検診車への搭載の評価は、受診者アンケートにすぐに表れた。1,200名の経鼻内視鏡出張検診受診者のうち98%が、『バリウム検診（胃部X線検査）より良い』と答えているのである。

「当院では、院内の人間ドック検診の胃の検査には、経鼻内視鏡導入時より胃部X線検査と経鼻内視鏡・経口内視鏡検査を同費用にて受診者に選んでいただいています。その結果85%の方が経鼻内視鏡検査を選択され、90%以上の方が次の検診も経

鼻内視鏡を希望されました。

『“鼻から入れる胃カメラ”は、とてもいい』との評判は、またたく間に広がっていったようです」

早期発見のためにも 楽で安全な内視鏡検査を

これからの経鼻内視鏡検査システムの普及の意義について池田先生が語る。

「受けやすくなった経鼻内視鏡検査システムの重要な役割のひとつは、胃がんの早期発見。現代医学では、胃がんは早期発見・早期治療で克服可能な疾病です。

その事実を鑑みれば、経鼻内視鏡検診が受診者への負担を減らし、広く普及する意義は、計りしれないほどに大きいでしょう。

私は、少なくとも早期胃がん発見については、内視鏡検査がもっともすぐれていると信じています」

日本の医療においては、いまだ胃がん検診はバリウム造影X線検査が



経鼻内視鏡検査車



経鼻内視鏡検査車の車内の様子

多数を占めているが、X線検査では読影医の診断能力差が検査結果に影響する。とりわけ早期がん発見は高い読影の技術がなければ、なかなか困難だ。全国のがん専門医がその点に気づき、内視鏡検査の意義にさらに深い理解を持つことを池田先生は切に願っている。

池田先生が経鼻内視鏡検査システムの臨床実績を集計分析し、積極的に学会において発表しているのもそのためだ。

急がれる胃がん早期発見のための内視鏡検査普及。普及の推進力の一端を担うのは、おそらく経鼻内視鏡検査システムだろう——検査車への経鼻内視鏡検査システムの搭載は、そのような志を背景に実現されたに違いない。

同院で繰り返されている経鼻内視鏡検査システムに関する、検査の精度を上げる、あるいは多くの検査を可能にするための格闘が、その証と言える。

「医療施設内でのドック検査などでは、悪性の疑いのある部位が見つければ、すぐに内視鏡スコープの鉗子で粘膜を一部採取する生検検査に移りますが、医療保険請求上、検査車での検体採取は認められておりません。ですから、検査医には通常の観察だけでより詳細な判断ができる高度な『目』が求められます」

検診日の天候まで 気にかける内視鏡医

これほどの尽力をしても「自分にできることを粛々と行っているにすぎず、声高に『日本のがん医療、こうあるべし』と主張するつもりはありません」と謙虚な姿勢を崩さない池田先生。最後に、実に味わい深い所感を披露してくださった。

「私は、出張内視鏡検診に出かける朝、空模様を眺めます。集団検診では天気が悪ければ受診者に申し訳ありませんし、たとえば雪や雨、強風のときなどは内視鏡スコープの硬度

やバッテリー、機材に影響が出る場合があります。

天気を気にして1日をスタートする内視鏡医など、そうはいないでしょう(笑)。

ひとりでも多くの方が精度の高い胃がん検診で健康を自覚できるように、これからもがんばるつもりであります」



DATA

池田病院

所在地：〒411-0945

静岡県駿東郡長泉町本宿411-5

TEL：055-986-1212

URL：http://www.ikeda-hp-g.or.jp/

病床数：110床

診療科目：消化器科、内科、外科、整形外科、婦人科、放射線科、脳神経外科、リハビリテーション科、女性外来

*同院ホームページより転載